

プラトニズム再考(1)

—— 現実の事態・事物との関係で ——

種山(友村) 恭子

はじめに

—— プラトンに対するベルクソン及びホワイトヘッドの所見 ——

まず最初にこの論文での私のスタンスについて記しておかなければならない。プラトンの思想が、その直接の弟子アリストテレスをはじめ、ヘレニズム期やローマ時代を通じて様々な形で影響を及ぼしてきたことは言うまでもないし、プラトニズムの一側面が、新プラトン派のプロティノスなどを通じてキリスト教神学と結び付いて大きな潮流を生み、ルネッサンスでは新しい思潮に息吹を与え、また、デカルト以降の近代の哲学を通じて流れ、さらに、例えばプラトニストを自認するホワイトヘッドのような数学者・形而上学者の発想に深い影響を及ぼしてきたこと——こうしたことは改めて言うまでもない。「ヨーロッパ哲学の伝統の一番安全な性格付けは、それがプラトンへの一連の脚注から成り立っていることだ¹」とするホワイトヘッドのコメントもあながち大袈裟とは言えない。

しかし、例えばニュートンの『プリンキピア』の訓詁学的な研究に明け暮れしてきた人が「ニュートンにおける彗星の語の用法」の権威ではあっても、実物の彗星には全く興味を示さない限り、そういう人は確かに物理学者でないのと同様、仮にプラトンが「實在」(ousia)と呼んだものを、プラトンのテキストの文脈だけから定着させようとす

る人があるなら——この作業も重要であるのはむろんであるが——そういう人は、少なくともプラトンが注目していた当の対象には無感覚な人、従って「哲学」には関心がない人と言わなければならないだろう。それに、われわれが、「真実在」だとか「アイデア」だとかを、われわれ自身も否定できない現実の頑強な事態・事物とは全く無関係な別次元のものとして口走る場合、それらは単なる言葉に終るだけでなく、その言葉とともに、われわれは、日常見ている太陽だとか星だとかを連想して、そのイメージを持ち込みがちである。そして挙げ句、他者から見れば、そういう種類の存在は、所詮、冥想状態の特異な状況の中でしか把握できないように見えるだろうし、従って、「哲学者」とは修行僧のようなものに見え、しかし修行をしている気配もない限り、「哲学者」とはただ不可解な言葉を口にしていくだけの得体の知れない、一種の詐欺師のように見えるかも知れないのである。

しかしわれわれとしては、政治の現実を分析すること、そして、正常な制度・法律はどうあるべきかの提案を試みことを、プラトンの主要な目的として位置づけるところから出発することにする。実際、プラトンの諸対話篇に登場するさまざまな人物は、現在のわれわれの身辺にもいそうな人物のように見える。さらに、「自由人の共同体」として成立したポリスは、今日のデモクラシーのプロトタイプと言える。むしろ古代ギリシアと現代では様々な点で、大きな違いがある。何よりも現在では奴隷制は存在しない——と言うよりも、今日では、誰もが奴隷であってはならないということが大前提となっている。しかし、そういう相違があるとしても、「自由人の共同体」の構想を目指したプラトンの人間分析は、今日もやはり興味深いもののように思われる。われわれは本稿でプラトンの試みた人間分析を、「現実の事態・実物」との関係に焦点を当てて検討したいのであるが、そのためにまず、ベルクソンとホワイトヘッドという二十世紀の哲学者の所見を取り上げるところから始めたい。

a ベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』より

確かに、人間を社会的動物としての考へるとき、人間がもしも、蟻や蜂のようにそれぞれ身体構造の上でも分業し、整然たる階層社会を構成して本能的に排他的であるとすれば、そのようなものとしての人間存在は、人類諸部族の小集団を維持する上には最も効率的な構造のものだと言へるかも知れない。しかしそのような意味での自然的動物としての人間は、際限のない部族闘争によって自滅するかも知れないのである。自然的動物である限りにおける人類が自然的本能によって作り出す「閉じた社会」の原始性を問題とする、ユダヤ系フランス人ベルクソンは、ナチスが台頭し始めていた一九三二年に出版された『道徳と宗教の二つの源泉』で、「民主制こそは、ありとあらゆる政治思想のうちで自然から最もかけ離れたものである」と言っている。団結、位階序列、首長の絶対的權威といったもので特徴付けられる「自然的社会」は、しかし、現に生きている人間にとって可能な唯一の社会形態かどうか。ベルクソンは生物の進化というものは、そのような社会的動物を構成する段階を最終の目標とするものではなく、全人類の融和というところへと飛躍するものはずだとする。ベルクソンの描く進化の像は次のようなものである。——生(①)は物質の中に入り込み、有機体を形成し、進化して行く。閉鎖的な序列社会を形成する段階にとどまったままの状態に甘んじていることも可能だったかも知れないが、しかし「全人類を抱擁する単一な社会」が可能と見えるほどにまで意識変革が起こるには、人類が知性的存在だというだけのことでは不十分なのである。「万人をわが兄弟と感じ得る、特に選ばれた人々が生まれてきた。そうした少数の選ばれた魂は、集団の眼界内にとどまっていないで、のみならずまた、自然の確立した社会の連帯性に甘んじてもないで、(愛の躍動) (élan d'amour) に包まれて人類全体を目指して進んだ。このような魂の出現は、そのつど、あたかも唯一の個体からなる新しい種の創造とも言うべきものであり、ここで生の推進力 (poussée vitale) は、人類の総体に対して一挙に得られるべくもなかった成

果に——長い間隔をおきつつ特定の個人のうちで——達したのである。」⁴ こうしてベルクソンは、全人類への同胞愛は、生の躍動 (elan vital) が実現して行く創造的進化の力 (effort d'évolution créatrice) を体現した人たちののだと言⁵い、この躍動は並々ならぬエネルギーとして、聖パウロ、聖テレサ、聖フランシスといった人々の着想や実現の能力として現れるのだと言⁶う。純粹観想 (contemplation pure) に導くような神秘主義ではなく、行動へと駆り立てる躍動力が見られるものとして、ベルクソンはユダヤ教を擧げ、イエス自身もこの民族宗教の一つであったユダヤ教の根本的転形 (transformation profonde) であつたとして位置づける。⁷ このようなベルクソンの観点からすれば、ギリシアの思想は平板で静的なものでしかない。人間の魂 (âme) についても「われわれは、プラトンに与して経験抜きに (a priori) 魂の定義なるものをまず定め、この魂は単純なるがゆえに分解されえず、不可分なるがゆえに不壊であり、その本質のうえから不死のものだと論じることができよう。……プラトンの靈魂概念は、これに関する二千年間にわたる思索にもかかわらず、魂についてのわれわれの認識を一步も前進させはしなかつた。魂についてのこの概念は、三角形の概念と同様、一挙に決定されたものだった。……けれども、もし靈魂問題というものが本当にあるとすれば、この問題は経験に即して述べられねばならぬということ、またその解決も経験に即して、前進的に、しかもどこまで行っても部分的に得られるにすぎないということがどうしてわからないのか。」⁸——失語症の症例を収集するなど、実証的な裏付けをも怠らなかつたベルクソンはこのように言うのである。

b ホワイトヘッド『観念の冒険』より

ベルクソンは以上のように、古代ギリシアの知性主義を静的のものとし、これに対して、全人類への同胞愛へと向かう、「生」(la vie) の動的な飛躍はむしろ、宗教的——特にキリスト教の——神秘的体験として現れて、人類の歴

史を動かしてきたと言うのであったが、他方ホワイトヘッドのほうは、キリスト教に具体化されている倫理的観念も、もっと一般的・普遍的なプラトン風の観念の特殊化された一例に過ぎない——と見る。⁹⁾そして、ベルクソンが全人類への同胞愛などは蟻や蜂なみの社会的動物である限りにおける人間には生じることではなく、キリスト教神秘主義に現れているような動的な躍進の力こそが、閉鎖的な小集団を形成する自然的動物の枠を破って人間を進化させるとしていたのに対して、ホワイトヘッドのほうは、生きる自然そのものが永遠的な理想へと、紆余曲折の道程を経ながら、動的に躍進して行くものだと言う。キリスト教が、人間の魂に関するプラトンの説を急速に同化吸収していったという事例を挙げて、ホワイトヘッドはそうした動的な展開の背後に、何らかの「一般的観念」(a general idea)が人類を推進しているという図を見る。「その背景には、そこはかとなく浮動しながら、一つの一般的な観念があるのだろうが、これをその一般性そのままありありと捉えるのは、ほんの少数の人々でしかないだろう——いや、あるいは、こうした一般的な観念が何らかの説得力のある十分な普遍的形式で表現されることは決してないのかも知れない。しかし、このような説得力のある表現は、偶然に生まれてくる天才に俟つものである。例えば、プラトンのような人が出現する偶然の機会にかかっている。しかしこの一般的な観念は、表現されてあるにせよ、意識の表面のすぐ下に暗黙のうちに潜在してあるにせよ、とにかくそれは、次々と相次ぐ特殊な表現に自らを具体化して行く。それは身を屈してその一般性の偉容を失うことになるが、特定の時代の具体的状況への特有の適応力は増すことになる。この一般的な観念は隠れた推進力なのであり、人類の心から去ることなく、そして、いつもその時代の不安な良心に訴えることよって行為に強制を加えるという、そうした特殊な姿を装って現れるのである。」¹⁰⁾

5
因に、この『観念の冒険』が出版されたのは、一九三三年であって、これはベルクソンの『道徳と宗教の二つの源

『泉』が出版された年の翌年に当たる。ドイツではヒトラーが首相となり、その翌年には首相兼総統に就任することになる時期であるが、ケンブリッジ在任中にラッセルと共著の『数学原理』(*Principia Mathematica*)を出版した数学者ホワイトヘッドは、この年にはすでに、アメリカに渡ってハーヴァード大学で哲学科の教授となっていた。射影幾何学など抽象的科学与自然世界の関係などにも興味深い所見を展開するホワイトヘッドと、大脳生理学や生物学を研究したベルクソンの視点にはむろん相違があるが、しかしどちらもが二十世紀の人であるこの二人は、ともに動的に進化して行くものとして、「人類の歴史」を展望しているわけである。

プラトンにとって数学は正確にはどういう意味を持ったか、また、人体の生理機能や生命現象・意識現象へのプラトンの所見はどういうものであったかについては、後に触れることにする。今は、ベルクソンやホワイトヘッドが動的に展開する「人類の歴史」の中に——積極的にせよ消極的にせよ——位置づけたプラトンの思想について、何よりもまず、紀元前五—四世紀当時のアテナイの政治や社会の現実に対するプラトンのアプローチの仕方を検討し、それと、いわゆる「イデア論」の関係を論じることにはしたい。

1 ギリシア世界の混乱と変動

ホワイトヘッドは、プラトン風の観念の普遍性・一般性を強調していたが、われわれはまず、プラトンが「普遍」を追求した——というよりも、追求しないわけには行かなかった、その背景を、われわれの視点から指摘したい。

メノンの徳目

例えば「徳」(アレテー、*arete*、原義は「立派さ」「優れていること」「卓越性」など¹⁾)とは何か、という問題から始まっている『メノン』に注目したい。テッサリアから来た青年メノンがソクラテスに対して「徳というものは、果

して人に教えることの出来るものかどうか」という質問をしかけるところからこの対話篇は始まる。個々の技能では教えられて上達するということがあっても、優れた人物の「卓越性」(アレテー)は親なり教師なりから教えられることの可能なものかどうか、という問題は、真面目にか、あるいは問答好きのギリシア人の格好な論題としてか、とにかく当時一般的に論じられていたものようである。「徳が教えられ得るかどこか、徳というものが何なのか、ほくは知らないのだ」というソクラテスに向かつて、テッサリアで弁論術の教師ゴルギアスの影響を受けたメノン⁽¹³⁾は、「何ですって? あなたは〈徳〉が何かということすら知らないんですか?」と言って自分のほうで講釈を始める。——「男の徳とは、国事を処理する能力を持ち、かつ処理するに当たって、よく友を利し敵を害し、しかも自分は何ひとつそういう目にあわぬように気を付けるだけの能力をもつこと。女の徳とは、所帯をよく保ち夫に服従することによって、家そのものをよく斉えるべきであること。等々」⁽¹⁴⁾ こうしたいわゆる「徳目」の列挙に対するプラトンもしくはソクラテスの批判については後に取り上げることにし、われわれはいま、トゥキユディデスから若干引用したい。

トゥキユディデスより

7
トゥキユディデスは、アテナイとスパルタ両陣営に分かれてギリシア全土が泥沼のような紛争に搖れたペロポネッス戦争についての著作『戦史』(Histories)において、あちこちの都市でアテナイ勢の加勢を導入しようとする民衆派領袖と、スパルタ勢を入れようとする寡頭派の紛争が生じて全ギリシア世界が動乱の渦中に陥ったとして、次のように述べている。——「内乱を契機として諸都市を襲った種々の災厄は数知れなかった。この時生じたような実例は、人間の本性 (physis) が変わらない限り、個々の事件の条件の相違にに応じて、多少の緩急の差や形態の差はあっても、未来にも絶えず起こって来ることであろう。何故なら、平和と繁栄の中にあっては、国家も個人も自分の意に反する

強制のもとに置かれることがないために、よりよい判断 (gnome) を選ぶことが出来るが、他方、戦争は日々の円滑な暮らしを足元から奪い取り、腕力沙汰の教師となつて、ほとんどの人間の気分を目先のことへと釘付けにする。……やがては、言葉すら、本来それが意味するとされてゐる対象を変更して、それを用いる人の行為におもねるようなものとなつた。例えば、〈無謀 (alogistos toima) が〈党を利する勇氣 (andreia philetairos) と呼ばれ、〈先々を配慮しての躊躇 (mellisis promethes) が〈臆病 (deilia) 〉、〈思慮分別 (to sophron) が〈卑怯者の口実 (tou anandrou proskhema) 〉、〈すべてを解する力 (syneton) 〉が〈万事につけて無為無策 (argon) 〉と思われた。……」この場合、トゥキユディデスは党派 (hetairia) というものに注目している。「陰謀通りに事を遂げれば知恵者、その裏をかけば、もっと腕利きと言われた。だがこれらの奸策によるまいとして手だてを講じる者は、党派の団結を破る者、反対派に脅かされているものとして非難された。……もともと、このような党派の結合の目的は、従来の慣習・法律 (nomoi) に基づいて益し益されることではなく、既存の体制を度外視して、自派の權益を増大することにあつた。従つて、党内の相互の信頼も、神聖な誓いによつて結束されたものは少なく、多くは共犯意識によつて固められていた。……そして大多数の者にとつて、善行をなして馬鹿と呼ばれるよりも、悪行をなして利口と呼ばれるほうが抵抗がなかつたのであり、人々は、善人であることを恥じ、悪人であることを自慢した。これらすべての原因は、物欲 (pleonexia) と名誉欲 (philotimia) をもとした〈権勢 (arkhe) 〉ということであつた。……諸都市における両派の首領達はそれぞれ、体裁のよい旗印を掲げ、民衆派の首領は政治平等 (isonomia politiké) を、寡頭派は良識優先 (sophronos promesis) を標榜し、言葉の上では国家公共の善につくすと言いながら公共の益を私物化しようとし、反対派に勝つためにはあらゆる術策を用いて抗争し、ついには極端な残虐行為すら辞せず、これを受けた側はさらに過激な復讐をやつてのけた。」¹⁵⁾

プラトンはまた『国家』で、財産評価に基づき少数の金持ちが支配する政治形態である〈寡頭制〉¹⁶から、〈民主制〉への変化を述べている際に、次のように述べている。——寡頭制のもとでは、金儲けの役に立たない欲望はすべて〈不必要な欲望〉とされ抑えられてきたのであるが、こうしたけち臭い寡頭制的な父親は自分の子供達については贅沢に甘やかすわけで、こうして、教養ということを無視してひたすら物惜しみする環境で育った青年が、一度、浪費・贅沢の味を覚えると、抑えられていた欲望が噴出して青年の魂を占領する。彼らは〈慎み〉(aidos)を〈お人好しの愚かしさ〉(elithotes)と呼び、〈節制〉(sophrosyne)を〈勇氣のなさ〉(anandria)、『程のよさ』(metriotes)と〈締りのある金の使い方〉(kosmia dapanē)を〈野暮〉(agroikia)とか〈自由人らしからぬ賤しさ〉(aneleutheria)とか呼んで貶めて追放し、逆に、〈傲慢〉(hybris)を〈育ちのよさ〉(eupaidousia)、『無統制』(anarkhia)を〈自由〉(eleutheria)、『浪費』(asotia)を〈度量の大きさ〉(megaloprepeia)、『無恥』(anaidēia)を〈勇敢〉(andreia)などという美名で呼んで、かつては追放されていたそれらを連れ戻す——¹⁷。

以上、トゥキュデデスは内乱に際しての生活の不安定から来る言語そのものの意味の変質に注意し、プラトンは金儲け第一主義の社会に育った青年が野放図な浪費のみに走る際に起る、言語の変質について述べているわけであるが、少なくともトゥキュデデスは、この現象を慨嘆して次のように言っている。——「こうして内乱の度にギリシア世界には、あらゆる形態の道德的退廃 (kakrotopia) がひろまった。……市民は互いに政見を異にして敵視しあったために、いたるところに猜疑の念が目立って強く現れた。何故なら、これを和解させるべき言葉 (logos) も、頼みとする根拠を失い、厳かな誓約も拘束力を失ったからであり、また誰でもが勢力を握ればみな、自分の安泰に期待が持てないのを悟って、損害を蒙らずにすむための手だてに汲々とするあまり、他を信頼する余裕を失ったからである。」¹⁸ トウキュデデスの言う、こうした市民の猜疑心については、プラトンが無秩序状態の〈民主制〉に根ざす

最悪の政治形態だとする（独裁制）に関する節で言及したい。

いまはしかし、ペロポネソス戦争と無縁ではないこうした混乱を考えると、それではゴルギアスの影響を受けたメノンが、〈徳〉とは何なのか自分は知らないと言ったソクラテスに向かって、「男の徳とは云々」と述べ立てたのは、どういう意味を持ち得たかを検討したい。

2 説得術、大衆迎合術

ゴルギアスの〈重宝な弁論術〉

テッサリア出身のメノンが、シケリアのレオンティノイの人で亡命者としてギリシア本土に移り住んだゴルギアスの影響を受けたという点は先に述べたが、プラトンの『ゴルギアス』に登場するゴルギアスは、〈徳の教師〉を名乗るプロタゴラス¹⁹その他のソフィストと違って、自分は〈弁論の教師〉だと宣言していた²⁰。そして、〈弁論術〉とは、およそ存在するもののうちの何についての知識 (episteme) かとソクラテスが尋ねたのに対し、ゴルギアスは、それは〈言論〉 (logos) についての知識だと言うのであるが、ソクラテスはなおも質問を続ける。——例えば、医師の場合は病気についての言論と関係があり、体育術は身体の状態の良し悪しについての言論と関係があるわけで、これらは実地の行為と関係するとして、そうでない数論、計算術、幾何学など、実地の行為とは無縁の領域のもので、これらの扱対象というものはあるではないか、すると〈弁論術〉は何を対象とする知識なのか？——と。これに対して、ゴルギアスは、弁論術こそは、人間にとって一番重要で、一番善いものに関係するのだと言って、次のように語る。——「弁論術とは、それによって人々が自分には自由をもたらし、それが出来るとともに、また各自が自分の住んでいる国において、他人を支配することが出来るようになるという、そのようなものなのだ。つまり、言論によって

人々を説得する (πειθην) 能力があるということなのだ。法廷では裁判官達を、政務審議会ではその議員達を、民衆会ではその出席者達をといったように、どんな集会においても、人々を説得する能力があるということなのだ。君がもしもその能力を備えているなら、医者も、体育教師も君の奴隷になるだろうし、実業家にしても、実は他人、つまり弁論の能力があり、大衆を説得することの出来る君のために金儲けをしていることが明らかになるだろう。⁽²²⁾確かに城壁の構築や港湾の建設については専門の技術者が意見を述べるが、しかし、アテナイの城壁や港湾施設にしても、職人達の意見に基づいたわけではなく、政治家テミストクレスの提案によつて建設されたものであり、医者にしても、公務のために働く医者を選ぶ民衆などで、複数の医者が競争する場合は、弁の立つ医者のほうが選ばれるのだ、とゴルギアス⁽²³⁾は言う。「弁論家は、どんな人達を向こうに廻しても、どんな事柄についても、弁じる能力を持った人間なのだ。だから弁論家は何を話題に選ぼうと、大衆の前でなら、他の誰よりも説得力があるわけだ。」とゴルギアスは言うのである。しかし、だからと言って、医者達や他の専門家からその名声を剥ぎ取つてよいわけではなく、弁論術も正しく用いなければならぬのだと言いながら、「それでも、誰かが弁論の達人となつて、その技術で不正を行うことがあつても、教えた側を憎んだり追放したり、死刑に処したりするのは正当ではない」というのが、ゴルギアスの言い分である。⁽²⁴⁾

ゴルギアスの『ヘレネ頌』

われわれはここで、ゴルギアス自身のものとして残存している断片を顧みておきたい。彼は例えば『ヘレネ頌』では、古来、不貞の女性とされて来た伝説上のヘレネ⁽²⁵⁾を弁護する議論を展開している。——ヘレネがそのようなことをしたのは、(a) 運命、神々の意思、必然の決定といったものによるか、(b) 暴力 (βία) で奪い去られたためか、(c) 言葉 (logos) で説得されたためか、(d) 愛欲 (eros) に捉えられたためかである。しかるに (a) の場合は、

神々がしようと望んでいることは、卑小な人間が予知して防ぐことは不可能であり、力においても知力においても人間より強力な神々には、人間は従うしかないのである。故に、原因は運命や神々に帰せられるべきであつて、ヘレネは無罪とされなければならぬ。(b)の場合には、不法・不正に奪ひ去られた側でなく、奪った側が不正をなしたわけであつて、暴力沙汰で祖国を失ひ友を失つたヘレネは、むしろ気の毒とされるべきであつて、憎まれて当然なのは奪つた男のほうである。(c)の場合については、およそ言葉というものは強力なものであつて、恐怖を鎮め、苦痛を除去し、喜びをもたらし、同情の念を募らさせることの出来るのも、言葉である。詩にしても、聞く人を戦慄させたり、涙に暮れさせたりするものである。そして、大勢の人間がいろいろの事柄について虚偽の言論(logos)を捏造しては多数の人々を説得したのであり、現に説得するようなことをしている。実際、天空のことを論じている言葉にしても、信じられもしないものを、(思惑)(doxa)に訴えて、あたかも真実であるかのように思い込ませ、哲学者の論争にしても、(思惑)を確信させるだけのものである。薬にしても病気の治癒に効くものと致死的なものがあるのと同様、言葉もまた、苦痛を与えるもの、喜びを与えるものなどあれば、悪しき説得によつて魂に薬物効果を与え、魅了して欺くものもある。従つて、言葉で説得されたヘレネには非はなく、彼女は不運だったわけだということになる。(d)の場合、つまりヘレネが愛欲によつて捕らえられた場合は、およそ目に見えるものは、われわれの意思とは無関係に視覚に刺激を与えるのであつて、絵画や彫刻にしても視覚に刺激を与え、視覚を通して魂は苦しんだり喜んだり、恐怖を覚えたりするのであり、従つて、ヘレネがパリスの容姿を見て愛欲に取り付かれたとしても、一向に不思議ではない。また(愛欲)(eros)が神だとすれば、人間は神には抗し難く、さらにこれが人間の病氣や魂の過誤であるなら、ヘレネはむしろ不幸だったと見なされるべきである。以上、いずれの場合においても、ヘレネを非難するのは正当ではない——。そして最後にゴルギアスは、次のように結んでいる。「私はヘレネへの不当な非

難と、無知蒙昧な評判を論破しようとし、一つの議論を、ヘレネにとつてはこれを讀める頌として、しかし私にとつては〈遊戯〉(paignion) になるものとして書きたかつたわけである。⁽²⁶⁾

〈正義〉についてのトラシユマコスとカリクレスの主張

ゴルギアスは以上のように、いわば有罪とされている人物を無罪として弁じる弁護士の手法のようなものを書いてあるわけであるが、こうしたゴルギアスの影響を受けたメノンが弁舌爽やかに「男の徳とは、国事を処理する能力を持ち云々」だとか「女の徳とは、所帯をよく保ち夫に服従することによって云々」だとか述べ立てたとして、それはどういう意味を持ち得たか？ 「国事を処理する」とか「所帯をよく保つ」とかいつても、結局は「人々を支配する能力」だとメノンは言うのであるが、しかし、羊飼いが羊を支配し太らせて、売つて金を儲けたり、肉にして自分の食用にしたりする場合も、「支配する」には違ひないのである。「国における支配者たちが被支配者に対して持つ考へは、ちょうど人が羊に対して持つ気持ちと同じであつて、支配者たちは、どうすれば自分自身が利益を得るかということに、絶えず頭を使つているのだ。」——これは『国家』に登場する弁論家トラシユマコスの言い分である。⁽²⁷⁾ そもそも〈正義〉などというものは、強者・支配者の利益になることであつて、お人好しの〈正しい人々〉は結局、他人である支配者・強者の利益になることに忠実である結果、実は損害を蒙るわけである、だから、こそこそと泥棒や詐欺を働いて罰を受けるよりは、独裁者のように、一国全部を手中にして、自分の利益に合致するように、人々を隷属させるなら、かえつて〈幸せな人〉と呼ばれるのだ——というのがトラシユマコスの主張なのである。⁽²⁸⁾

そして、『ゴルギアス』に登場するゴルギアスが、弁論術を心得ていれば、法廷においても民会においても人々を説得することが出来て、自分自身には自由をもたらすことが出来るとともに、他人を支配することが出来るようになる点として、先に挙げたところであるが、この同じ『ゴルギアス』に登場する、新進政治家カリクレスは率

直に本音を語る。——〈自然〉(physis)と〈法律・習慣〉(nomos)とは、たいていの場合、相反するもので、〈自然〉においては、優秀な者・有能な者が、劣った者・無能な者よりも、〈より多くを持つ〉(to pleon ekhein)の正当(dikaion)なのである。これは他の動物の場合もそうであるし、人間の場合も、国家と国家、種族と種族という観点で考えれば、その通りであることは明かである。しかし、世の大多数を占める弱者が、自分達の利益を念頭に置いて法律を制定し、〈より多くを取る〉のは醜いことと不正なこととして非難し、〈平等〉を立派だとし、強者に対してその子供の時から、そのような呪文を唱えて飼ひ慣らし骨抜きにする。しかし誰か充分な素質を持つ男が現れて、こうした束縛をずたずたに引き裂き、反自然的な法律習慣を足下に踏みこじって立ち上がる時、〈自然の正義〉は燦然と輝き出すのだ——³¹⁾。

以上のようなトラシユマコス、カリクレスの主張は、汚職・贈収賄事件で逮捕されたことに不当を覚える政治家や、人種差別撤廃運動に対してどうしても抵抗感を覚える人々が、暗黙のうちに前提としている世界観を代弁しているものとも言えるだろう。

トゥキユディデスは内乱による生活不安定から来る道徳的退廃を慨嘆していた。しかし、〈安定した社会〉とはどういうものなのだろうか？ それは旧体制に戻ることの意味するわけではないはずである——旧体制そのものが矛盾を抱えていたために内乱が起こったとすれば。アリストパネスの喜劇『雲』は、ソクラテスを、青年に屁理屈を教える詐欺師として描いている作品として有名であるが、ここでは、〈正論〉(Dikaos Logos)に扮する俳優と、〈邪論〉(Adikos Logos)に扮する俳優とが次のように言い争う場面がある。——正論「いにしへの躰がいかなるものであったか、お話し申そう。それはこのわしが正論を吐いて、いや榮えに榮え、節度(sophrosyne)というものが重んじられた頃のことだ。まず第一に、子供は口の中でもぐもぐ言うような話し方を人前ですることは決して許されなかった。

……また食卓では……旨いものばかり取って食べたり、くすくす笑いをしたり、足を組んでいたたりすることも許されなかつたのだ。」——邪論「いやはや、古色蒼然、今はすたつた昔の祭礼を思わせるものばかりだ。……時代遅れの詩人やら、牛殺しの儀式やら、あるわ、あるわ。」⁽³²⁾そして、ソクラテスの学校でこうした邪論を教授された息子ペイディッピデスが、些細な口論の挙げ句、旧世代の父親を殴りつけ、しかもなぐつたのは正当だ (en droit) だと言つて、次のように言う。——「気のきいた新しい風潮に馴染んで、現存の法律や習慣を軽蔑するというのは、何と愉快なことだろう。……「父親に向かつて」(父親をなぐるのを認めないというような) そういう法律は、それを定めた人間が最初にいたわけじゃないですか。あんたやぼくと同じような人間がね。そして昔の人間を、弁論で説得するようにしたんじゃないですか。そんならぼくだって、これから先、息子に有利な新しい法律を、あらためて制定して、親父をなぐり返せというようにすることだって、同様に許されていいんじゃないですか。……そこらにいる鶏だって、ほかの動物だって、父親に仕返しをしますぜ。しかもあいつらとぼくたちの違いは、動物は法案を出して、投票を求めたりしないというだけのこと、それ以外に何がありますかい。」⁽³⁴⁾

15
当時すでに、エレア派のパルメニデスやゼノンによって、〈存在するもの〉と〈存在しないもの〉とを厳密な論理で区別する論証が提示されてから、生成・消滅・変化する現実の現象と、不動の〈存在者〉とのギャップに人々は困惑しないわけには行かなかつた。⁽³⁵⁾ またアテナイに来てペリクレスと親交のあつたアナクサゴラスの自然学説が保守的な層から〈無神論的〉とされ弾劾されていた。そして、ソクラテス自身が無神論者であり青年を毒する者だとして告発され、結局は死刑の判決を受けることになったその裁判の場で、原告側が、ソクラテスは太陽は石、月は土だと主張しているのだと言いつた時、それはアナクサゴラスの説なのだと言つてソクラテスが言っているのが、『ソクラテスの弁明』に見られることも付け加えておく。⁽³⁶⁾

3 諸部族の慣習・習俗

ヘロドトスより

ところでカリクレスは、〈正義〉を述べている際に、クセルクセスがギリシアの地に侵攻してきたのも、スキュティア人のところへ攻め込んだのも、優秀な者・有能な者が劣等な者・無能な者よりも（より多くを持つ）のが本来の正しいあり方だという、〈自然の正義〉に従ったのに他ならない、と言っているのであるが、われわれはここで、ギリシア人の周辺の民族の慣習を、ヘロドトスを通じて一瞥しておく。

ペルシア戦争が始まって七年ばかり経った頃（四八五頃）に、小アジアのギリシア人植民市ハリカルナッソスに生まれ、ペロポネソス戦争（四三二―四〇四）の勃発にも遭遇しているような年代（四二五頃）に死んだとも考えられているヘロドトスは、ペルシア、バビロン、エジプト、黒海近辺などへ足をのばす大旅行をして、実際に見聞したり、伝え聞いたりしたことを記録し、『歴史』(History, 研究調査、情報)を書いたのであるが、その中で、〈バルバロイ〉の習俗について彼が記している箇所のうち、スキュタイ人の習俗に関する箇所の一部を記しておく。――彼らは最初に倒した敵の血を飲む。また戦争で殺した敵兵の首を王のもとに持参する。そうしないと戦利品の分け前に与ることが出来ないからである。敵の首については、耳のあたりで丸く刃物を入れて頭皮と頭蓋骨を離し、頭皮から肉をそぎ落し、手で揉んで柔軟にすると手巾のようになるので、これを自分の乗馬の馬銜（はみ）に掛けて、その数を誇る。また、王が病気になった時には、占師を三人呼ぶが、彼らの答えは大抵の場合決まっています、何某が王の竈にかけて偽誓したためだと言う。名指された男が否認すると、別の占師達が呼び寄せられ、後者の占師達がかの男を無実だとすると、また別の占師達が呼び寄せられ、大多数の占師達はその男を無実と認めると、最初の占師は、縛られ

て牛車に積んだ薪の中に押し込められ、薪に火がつけられ、焼死させられる³⁸。

言葉も通じないようなスキュティアに関するヘロドトスのこうした記述がどこまで正確であるかは、疑問の余地があるとは言え、少なくともギリシア人が自分の周辺に、〈蛮風〉の浸透している部族がいろいろといるらしいという程度には意識していたことは事実であろう。そして、こうしたスキュタイ人だとか、また「戦争と略奪で生計を立てるのを最高の生き方としている」とヘロドトスが評しているトラキア人³⁹と違って、〈文明圏〉に属していたと言えるバビロンにも、一年に一回、適齢期の娘達を一所に集めて、周囲を男達が取り囲み、一番の美人から始めて、値段をせり上げて落として行くという、娘の競市が開かれていたと、ヘロドトスは伝えている⁴⁰。

キュロス**は**バビロン人を征服した後、マッサゲタイ人をも配下に収めたくなくなったのだとして、ヘロドトスは、スキュタイ人と同人種だとする人もいるというこの勇敢な民族と、侵攻してきたキュロス軍との熾烈な戦闘の場面を描き、結局、キュロスはこの戦闘で命を落とし、その遺体から、マッサゲタイの女王が首を切つて、人血を満たした革袋に投げ込んで、「約束通りにそなたを血に飽かせてやろう」と言つたと記しているが、このマッサゲタイ人の間では、非常な高齢に達した者は、縁者がこれを殺してその肉を食べ、その老人が病死ではなく、そこまで生きながらえたことを祝福する習慣があつたことをもヘロドトスは伝えている⁴²。

17
ところで、このマッサゲタイ人の風習については、多分、ペロポネソス戦争が終つて間もない頃に書かれたと思われる、作者不詳の『両論』(Dissoi Logoi) もまた、マッサゲタイ人のこの風習に言及して、「親を殺して食べるなど、ギリシアでは、こんなことをする者があれば、国外に追放され、醜悪で恐ろしい所行の故に、惨めな死に方をするだろう⁴³」と述べているが、ヘロドトスのほうは、むしろ、好奇心に満ちて、ギリシア世界と異邦人(バルバロイ)とを等分に見ていたように思われる⁴⁴。実際またヘロドトスは、カンピュセスがメンピスで古い墓を暴いて死体を見た

り、聖所を荒したりしたことを挙げて、次のように言っているのである。——「カンビュセスの精神が極度に錯乱していたのは明白である。さもなければ、信仰や慣習に関わることを敢えて嘲笑しようとしたはずがないからである。実際、どこの国の人間にでも、世界中の慣習 (anani) の中から、最も良いものを選べと言えば、熟慮の末、誰もが自国の慣習を選ぶに違いない。このようにどこの国の人間でも、自国の慣習を格段にすぐれたものと考えているのである。そうだとすれば、これほど大切なものを嘲笑の種にするということは、狂人ででもなければ考えられない行為と言えるだろう。」⁽⁴⁵⁾

そして『両論』の著者も、マッサゲタイ人とギリシア人の風習の相違や、スバルタとイオニア、リュディアとギリシアなど、それぞれの風習の相違を挙げて、こう言っている。——「思うに、もし誰かが、すべての人間に向かって、各自が醜いと認めるものを一所に持ち寄るように命じ、次に再びその醜いものの集合中から、各自が美しいと考えるものを取るように命じるなら、一つも残らず、すべての人がすべてのものを取り尽くすだろう。万人が認めるところ (nomos) は同じではないからである。」⁽⁴⁶⁾

確かに、各民族はそれぞれの風習を持ち、それに従って生活を送っている。スキュタイ人は倒した敵の首の皮を剥ぎながら、高揚した勝利感を覚え、やがて王から戦利品を分与されるだろうという期待に溢れていたかも知れないし、マッサゲタイ人は親の肉を口にしながら、ここまで長寿を保ってくれた親に対する祝福の感情に溢れ、今や親と一体になっているという親愛感に感動していたのかも知れない。

「人身御供だとか人間奴隷だとかは、宗教の大きな直観や文明的なさまざまの目的が、祖先伝来の本能的行為の野蛮を手段として、自らを表現している例である。直接の宗教的直観は、どれほど純粹な起源のものである、既存の社会に瀰漫している低級な慣習や情緒と同盟する恐れがある。」⁽⁴⁷⁾——これはホワイトヘッドの言葉であるが、倒した敵の

頭皮を馬の馬衝にかけるといふスキュタイ人の慣習が、より洗練された勝利感の粗野な萌芽もしくは契機となるものなのか、あるいはまた、こうした風習を〈低級〉とか〈野蛮〉とか見なす価値判断自体が、今日の〈文明〉圏に在るわれわれの側の基準に過ぎず、これもまた単に相対的なものでしかないのかどうか。ホワイトヘッド自身は右の言葉に続いて、「宗教は哲学に一つの推進力を推進力を提供してくれるが、思弁的哲学 (speculative philosophy) は、通用している行動様式の事実には捕らわれない究極の意味を示唆することによって、われわれの高級な直観を低劣な同盟者から守ってくれる」と言っている⁴⁸。しかし、〈文明〉と〈野蛮〉の関係については、われわれは後に改めて検討することにした。

いまはそれよりもむしろ、以上のような内外の政治的現実を前にして、プラトン自身が、本来あるべき人間社会はどのようなものであるべきかを考える際に直面した、さまざまな問題を考えることにしたい。

4 民主制と独裁制

キュロスの率いるペルシアの軍隊がマッサゲタイ人を征服しようとして侵攻し、キュロス自身が命を落としたという話をヘロドトスが伝えていることは前節で述べたが、強国ペルシアにとっては、マッサゲタイ人は辺境の蛮族でしかなかったとしても、ペルシアはマッサゲタイ人にとっては、無法の蛮行を強行する侵略者であった。そして、アカイメネス朝ダレイオスの時、イオニアのギリシア人植民諸都市がペルシアの支配に対して反乱を起こし、アテナイが救援のために艦隊を送ったことで、その報復として、ダレイオスがエーゲ海の海路から遠征軍を送り、マラトンの戦いでギリシア側が勝利を得たわけであるが、プラトンはこの戦争に言及して、次のように言っている。——「この時仮に、アテナイ人とラケダイモン人（スパルタ人）との一致協力した心が、迫り来る隷属化を防がなかったとしたら、

おそらくとつきの昔に、ギリシア人の種族はすべて、相互の間でも、異国人との間でも、混合されて、ちょうど現にペルシアの専制に服している人々が、分散させられたり、寄せ集められたりして、悲惨な離散の暮しを送っているのと同じことになったなただろう。」⁴⁹これはしかし、むろん、〈強者〉であるペルシアに、〈弱者〉であったはずのギリシア——特にアテナイとスパルタが——共同一致して勝利を得たというだけにはとどまらない。〈大王の専制政治〉と〈自由民の共同体〉との戦いで、後者が勝つたことを意味する。

小アジアのカリア地方の都市ハリカルナッソスのヘロドトスは、アテナイの自由平等を賛美している。——「かくてアテナイは強大となったのであるが、自由平等 (isogoria) ということが、単に一つの点のみならずあらゆる点において、いかに重要なものであるか、ということを実証したのであった。というのは、アテナイが独裁下にあった時には、近隣のどの国をも戦力で凌ぐことが出来なかつたが、独裁者から解放されるや、断然他を圧して最強国となったからである。これによって見るに、圧制下にあった時は、独裁者のために働くのだというので、故意に卑怯な振舞いをしていたのであるが、自由になってからは、各人がそれぞれ自分のために働く意欲を燃やしたことが明らかだからである。」⁵¹

そしてプラトンも、ペルシアについて、キュロスの統治下では、支配者は被支配者に自由を分かち与え、彼らを同等に扱ったので、兵士達は指揮官達に親しみを覚え、率先して危険に臨んだのであって、当時であつては、自由、友愛、知性の共有のおかげで、万事が彼らに進歩をもたらしたこと、⁵²これに對して、われわれが見るのは悪化していったペルシアの姿だとして、次のように述べている。——「その原因は、われわれの主張では、彼らがあまりにも民衆 (demos) から自由を奪い去り、限度以上に専制的要素を持た込み、それによつて、国家内部の友愛と公共心を破壊したことであつた。ところが、これが破壊されると、支配者達が思案することと言えば、被支配者たる民衆のため

ではなく、自分の支配権のためのもとなる。もしも彼らが、僅かでも自分達の利益になると考えれば、親しい国々や種族さえ、兵火で滅ぼし、その結果、互いに敵意をもって容赦なく憎み憎まれることになる。」⁵³ 国制にはいわばその母と言うべき二つのものがあり、一方は〈君主制〉(monarkhia)、『他は〈民主制〉(demokratia)であって、他の国制はそこから生まれてきたと言えるが、前者の頂点にはペルシア民族が、後者の頂点にはアテナイが立っているのだと、プラトンは言⁵⁴い、ペルシアの統治が悪化したのは、極端な隷属と専制のためであることは既に述べたとし、しかし〈民主制〉が極端になった場合をも彼は批判している。——「反対に、いつさいの権威(arkhe)に縛られない完全な自由は、他者の権威に依存しながら適当な限度(metron)を守っている自由より、少なからず劣っている。」⁵⁵

この〈適度〉というキー・ワードは、特にプラトンの後期著作に目立つが、これについては、後に改めて詳論することにし、ここでは、プラトンが、君主制と民主制をすべての国制の二つの母胎とした後、引き続いて言っている言葉を引いておく。——「いやしくも思慮(phronesis)とともに、自由(eleutheria)と友愛(philia)が生じるべきなら、以上二つの国制を兼ね備えていなければならない。……ところがペルシアは君主主義を、アテナイは民主主義を、それぞれそれだけを必要以上に偏愛し、どちらの国も両者を適量に保持してはいなかったのである。」⁵⁶

『法律』のいま挙げた箇所では、以上のように、プラトンは〈民主制〉と〈君主制〉もしくは〈独裁制〉を並列させて議論しているのであるが、多数決制度の〈民主制〉が孕む問題については、各人が何かを〈納得する〉というのとはどういふ場合かをめぐって、プラトンは多角的に議論を展開しなければならなかったのであって、その点は後に詳論するが、次節では、認識論やパトス論に関わる問題を、〈現実の事態・事物〉との関係で整理しておきたい。

5 慣習・迎合・批判精神

小社会の慣習

「われわれは子供の頃、何でもなすがままにさせておいてもらえたのなら、楽しみから楽しみへと飛び回っていただろうが、そこには見ることも触れることも出来ない障害が立ちはだかつていた。へしてはいけない」という禁止がそれである。われわれがその禁止に従ったのは何故だろうか？　こうした疑念が起ることはついぞなかった。両親や先生がたの仰せ通りにする習慣が出来てしまっていた。……両親にせよ先生がたにせよ、どこか他から権限を委ねられて力を行使しているように思えた。このことをわれわれは、そうはつきりとは自覚していなかったが、両親と先生の背後には、何か途方もなく巨大な者、無際限と云ってさえよいような何者かの控えていることが感じられた。その者とは社会 (society) のことだと言うことになるだろう。……例えて見れば、目に見えぬ繋りによって結ばれた細胞が、互いに従属し合って見事な階層組織をつくり、すべてが全体の最大利益のために一つの規律に服している、有機体のような社会がそれであって、この規律には部分の犠牲を強要する力が備わっているだろう。⁵⁷——これはベルクソンの言葉である。

マッサゲタイ人にせよスキュタイ人にせよ、自分達の社会に通用している慣行に従って生活し、その規律の中で育ち、〈善い〉〈悪い〉〈正〉〈不正〉などの観念を、その慣行の中で個々の場合の行動を規制されたり勧告されたりした経験とともに、身につけてしまっていたであらう。内部で不満はあったとしても、その不満を言葉にして明確に表現することも困難だったはずである。何故なら、例えばスキュタイ人にとって、〈勇敢で優れた兵士〉と言えば、敵の頭皮を沢山馬銜にかけている者を意味するが、それは単に〈倒した敵の頭皮を多く所有している〉という単独の行為

を指しているだけのものではなく、こうした残虐と不可分に結び付いているような〈勇敢さ〉によってアジア内陸部を支配していたという優越感とも一体になっていたと言えるからである。〈価値観〉というものは、その行きわたっている社会体制の中に、まるで神経のように浸透しているものと言えるだろう。そしてこうした場合、習慣も異なれば言葉も通じない、従って理解することなどまるで不可能な相手のことなど、それが対等の人間だとさえ思えないであろう。スキュタイの勇士が、倒した敵の頭皮を馬銜に掛ける時、まるで猛獣狩で野獣を倒した時のように、仲間からの賞賛、王からの褒賞、他民族の畏敬の眼差しを意識しながら、充足感に胸をふくらませていたことであろう。そしてこうした感情は現在でも少しも変わっていないと言える。〈自然〉は蟻や蜂と同様、人類をも一個の社会的動物にまでは進化させたとし、こうした〈自然〉が意図したのは〈小さな社会〉だったとするのが、ベルクソンの見解である。「自然はわれわれと外国人との間を、互いの無知、偏見、誤解といった実に巧みに織られたヴェールで隔っている。……国外に滞在したのち、自分の同国人にいわゆる異国の〈心性〉(mentale)を紹介しようと試みたことのある人は、同国人たちが一種本能的な抵抗を示すことを認めたはずである。……(人間は人間に対して神である) (Homo homini deus) と言うのと、(人間は人間に対して狼である) (Homo homini lupus) と言うのと、この真つ向から反対する二つの格言を折り合わせるのはむずかしくない。第一の格言が述べられる場合には、人間といっても同国人のことが、そして第二の格言の場合には、異国人のことが考えられているのである。」⁽³⁶⁾

プラトンが〈戦争〉をどう見ていたか。『パイドン』に登場する死刑当日のソクラテスはこう語っている。――「戦争にしても内乱にしてもいろいろの闘争にしても、それらは他ならぬ身体と、その持つ欲望が生ぜしめているのだ。何故なら、戦争はすべての財貨の獲得のために起こるのだが、その財貨を手に入れよと強いるのは身体であり、

われわれはその身体への氣遣いに奴隸のように終始している以上は、どうしてもそうしないわけには行かないからだ。⁵⁹

しかしこの場合、戦争が〈哲学〉(philosophia、真実を求めること)に向かう暇さえ与えてくれないというのが、戦争が悪であることの主要な理由とされている。⁶⁰これはしかし、〈折角、学者が書齋に閉じ込もって哲学研究に没頭しているのに、空襲警報のサイレンや動員令のためにオチオチしていられない〉といったことを意味するわけではない。〈哲学〉が〈真実の探究〉を意味するとしても、それは、何を〈真実〉として判定するかの問題を重要な課題とし、それには、〈判断しているわれわれの精神機能〉を問題としないわけには行かず、それはまた、そうした〈精神機能〉が養われる社会体制ぐるみで考えられなければならないからである。実際、ホワイトヘッドが人身御供や人間奴隸の風習に言及し、これらは宗教の大きな直観や文明的な諸目的が、祖先伝来の本能的行為の野蛮を手段として自らを表現している例だと言った後、思弁的哲学が、究極の意味を示唆することによって、われわれの高級な直観を低劣な同盟者から守ってくれる、と言っていた点を、われわれは挙げたが(第3節末尾)⁶¹、この点でプラトンはどういう役割を果たしているだろうか。

6 プラトンの提起する問題

(1)

われわれは先に、ペロポネソス戦争に巻き込まれたギリシア諸都市で〈勇氣〉とか〈思慮〉とかいった言葉の意味が変質したとするトゥキュデデスの発言を挙げ、プラトンもまた『国家』で、政治が金権政治から民主政治へと移

り変わる時に、〈慎み〉が〈お人好し〉と呼ばれるといったことを指摘している点を挙げたが（第1節）、相互に言葉の意味すら一致しない中での〈多数決制度の議会〉はどういう意味を持ち得るだろうか？。プラトンの対話篇には、先の『メノン』の例で挙げたように（第1節）、〈徳〉とは何であるかについてソフィストの影響を受けた青年が弁舌爽やかに述べ立てるのを、ソクラテスが一つ一つ質問して行くところだとか、それに類した情景が描かれている。この場合、例えば、〈勇氣〉とは〈戦列に踏みとどまって敵を防ぎ、逃げようとしないうこと〉だと信じている軍人を相手に、ソクラテスが質問して行く場面が描かれているが、これはむしろ、ソクラテスが〈勇氣〉についての言葉の上での定義を試みているだけのものではなく、特定の立場——軍人の立場——でのみ通用している一種の〈気分〉と結び付いた〈勇氣〉という觀念が、別の立場（貧困だとか病気だとか）でも通用するものかどうかを吟味している過程といえるだろう。つまり、われわれ一般に混乱があつて、自分の狭い社会環境の中でのみ通用し、賞賛されている何らかの行為に、〈勇氣〉といった美名を冠し、それがあたかも、普遍的に通用するものであるかのように、その〈勇氣〉（実は無謀）のために迷惑を蒙っている人々の発言までも封じ込めるようなことをしがちなのである。われわれはここに、プラトンが、〈普遍的な価値觀念〉を求めようとしていた経過を見ることが出来ると言える。しかしそれは、〈人間の心の中の觀念〉だけの問題ではあり得ない。

(2)

われわれはここで、〈多数決による議会〉で、弁論術が効を奏するというゴルギアスの『ヘレネ頌』（第1節）を思い起こしたい。ここでは彼は、〈言葉〉には麻薬的な効果があることを述べていた。それはヘレネに対するパリスの言葉を指していたが、一般に、大衆相手の〈弁論〉にしても同様であることを、ゴルギアスは意識して、弁論術は重

宝なものと言っていたはずである。実際、俳優なみに声色を使い、手振り身振りを交えて語る弁論家に大衆が魅了される時、個人的な質疑で自分の立場を明確にしながら問いかつ答える場合よりも、無責任なまま、一種の〈気分〉に恍惚となるものだとと言える。そこで弁論家が口にする、例えば「国威を発揚するために出撃を！」という言葉に、多数者が同調して出撃を可決して大惨事を蒙ったことも、古来珍しくない人類の経験である。「善いだらう」と思っていたことが、「悪い結果」をもたらずとき、「善意だったから」という弁明は無力である。実際、「万物の尺度は人間だ」としたプロタゴラスは、どんな人間にも、その人に〈思われている〉ことは、その人にとって、誰もが否定し難く〈ある〉のだとしたのであるが、それなら別に〈人間〉でなくても、豚でも狒々でも〈万物の尺度〉ではないか、という言葉が、プロタゴラス説批判の展開されている『テアイテトス』⁶⁵に見られる。その場で〈そう思う〉というのでなく、将来の福利を目指しての立法の場合は、明らかに賢―愚の差が出て来るといのが、『テアイテトス』に登場するソクラテスの立場であるが、議会で多数者の喝采を得るための〈弁論〉と違って、例えば実物の身体状態の善し悪しを知って――患者に迎合するのではなく――治療をする医師に相当する技術を政治・司法の領域で重視しているのは、『ゴルギアス』⁶⁶にも見られる、プラトンの一貫した姿勢である。多数者の浮動的な気分の中で、何か壮大な意味を持つていそうで、実は混乱した〈言葉〉に振り回されるのではなく、その言葉――例えば〈善い〉――が、何か実質的な意味を持つていると考えられる以上、政治の上にごう反映されるべきか、それがプラトンにとつての重要な課題だったと言える。われわれの環境をなす社会体制がわれわれの〈判断力〉の形成の上でも重要な意味を持つことは、われわれは既に述べた。

ところで、プラトンはかのスキュティア人やトラキア人について、彼らは「気概がある」(Timonides)という評判を得ていると言っているが、万人の魂はもともと天上から来たとするプラトンは、個々の人間の魂も、単一のものではなく、〈知性〉と〈気概もしくは激情〉と〈欲望〉とから成るものと見る⁽⁶⁸⁾。われわれが、自分でも理由がはっきりとはわからないまま激したり、後先を考えずに、その場その場の欲求に駆られて手を出したりするのは、われわれの魂のこうした部分によるのだというわけである。われわれが〈思い込もう〉としても、それを許さない頑強な現実とは何なのか、われわれはあらゆるものを、〈自分の思い込み〉によって色づけ、自分自身のパースペクティヴに収めて、その枠に従って〈善い〉とか〈けしからぬ〉とか判断を下す。それが混乱するのは、社会が混乱した時、あるいは異質的な社会に遭遇した時であろうが、そうした中で、〈普遍的な真実〉にアプローチするためにプラトンが考えたことの一つが、この〈魂三区分説〉だと言えるが、それでは〈知性〉が〈知性〉だと言われるのは、何を把握するが故になのか、また、〈激情〉や〈欲望〉がその場その場で反応する場合に覚える〈情動〉の正体は何なのか——こうした問題は、〈知性〉の統御する個人に対応する〈知的な人〉の統治する国家がどういふものであり得るかの問題とも関連するのは言うまでもない。

しかし、われわれはこうした(1)、(2)、(3)の問題については、稿を改めて検討することにした。

〔注〕

(1) Whitehead, A. N.: *Process and Reality*, New York, 1960, p. 63.

(2) 実際、プロティノスは次のように述べている。「私はしばしば肉体(の眠りを)脱して(真の)自己自身に目覚め、他のすべての中から脱却して私自身の内部へとはいりこみ、ただただ驚嘆すべき素晴らしい美を観ることがあるが、この時ほど、

自分が高次なるものの一部であることを確信したことはなかった。その時の私は最善なる生を生き、神的なもの(完全に)合一してそのなかに自らの居場所を与えられ、あの最善の生命活動を通して他の一切の知性的なところに自らを据えていたのである。」(*Emmeades*, IV, 81. 訳は、田中・水地・田之頭訳『プロティノス全集』中央公論社、昭和六十二年)プロティノスは内観(introspection)の達人のような人で、彼の発言もきわめて興味深いし、実際、プラトンの特に『国家』には、プロティノスのこうした姿勢に結び付く面があることは否めない。しかしわれわれとしては、むしろ、様々に発展可能なプラトンの傾向のうちで、特に政治の現実を分析し、ソフィストの弁論の描き出す影像的知識を批判するという側面に焦点を当てるところから出発したいわけである。

- (3) Bergson, Henri: *Les Deux Sources de la Morale et de la Religion*, Presses Universitaires de France, 1973, p.299. なお訳としては、森口美都男訳(中央公論社『世界の名著 53 ベルクソン』所収)に従う。
- (4) *Ibid.*, p.97.
- (5) *Ibid.*, p.99.
- (6) *Ibid.*, p.241.
- (7) *Ibid.*, p.254.
- (8) *Ibid.*, pp.279-280.
- (9) Whitehead, A. N.: *Adventures of Ideas*, New York, 1967, p.18.
「キリスト教は激しい熱情と実行不可能に見える道徳的理想の宗教であった。……これらの理想が、比類のない改革のプロگرامをなして、これが西洋文明の発展の一要素となってきた。……しかし、宗教の観点から説かれたもののほうが、哲学の観点から説かれたものよりも、ずっと特殊化されたものではあったが。」(pp.15-16)
- (10) *Ibid.*, p.16.
- (11) 例えはホメロスでは、結局はアキレウスの投槍に命を落としたポリュドーロスについて「脚(の速さ)にかけては誰にもひけをとらない」(呉訳)というような意味合いの「ひけをとらない」の原語は *arete* である。ギリシア語のこの *arete* に当たる、ラテン語は *virtus* (それが英語の *virtue* の原語である)は、*vir* (男)に由来する語で「男らしさ」を意味する。
- (12) ヘロポネッス戦争(431-404 B.C.)が終って間もない頃の作品と推定される、作者不詳の『両論』(*Diisot Logoi*)には、知と徳が教えられもせず、学ばれもしないという議論が紹介されている。例えば、もしも教えられるものだったとすれば、ギリシアに生まれた賢者達は、自分の技術を息子達に教えたはずではないか、というのもその議論の論点の一つであり(Diels-Kranz: *Fragmente der Vorsokratiker*, 1966, 90, 6.)。プラトンはまた『プロタゴラス』においても、知恵があり優れた人

物であったペリクレスにしても、息子達に申し分のない立派な教育を与えながら、自分のアレテーを彼らに授けはしなかったと、登場人物のソクラテスに言わせており(319E-320A)、『この『メノン』でも、テミストクレスが惜しむことなく息子に教育を受けさせたところ、息子は馬術では上達したものの、知恵・徳に関しては一向に優れた人物になることはなかった、という例を挙げている(93C-E)。

(13) シケリア(シシリー)のレオンティノイの出身。レオンティノイはアテナイと同盟を結んでいたが、ペロポネソス戦争の初期に、ドリス系のシュラクサイなどから圧迫され、アテナイに救援を求めて使節を派遣し、その使節の代表がゴルギアスであった。彼はアテナイの議會を動かすのに成功したが、やがて郷里レオンティノイで政変が起こってシュラクサイに隸属したために、ゴルギアスは亡命者としてギリシア本土に移るようになった。そして数年間はテッサリアで過ごし、影響を及ぼした。以上、Plato: *Meno*, 71A-72A。

(14) 以上、Thucydides: *Historie*, III, 82。訳としては、久保正彰訳に従ったが、口調の点で若干変更した。

(15) 實質上は「金権政治」と言えるが、アテナイでの寡頭制理念は実際にこのようなものであったと思われる。藤沢令夫訳『国家』(『若波』「プラトン全集11」)五七九頁 注2を参照。なお訳語については藤沢訳に従った。

(17) Plato: *Respublica*, III, 560C-E, 555B-562A. を参照。

(18) Thucydides: *op. cit.*, III, 83。

(19) 注(13)を参照。

(20) 『プロタゴラス』には次のような場面が描かれている。——個々の専門技術をではなく、一個の素人としての自由人が学ぶにふさわしい一般的(教養)(*paideia*)をプロタゴラスから学ぼうとしている青年ヒポクラテスとともに、ソフィスト達が一堂に会している富豪の邸宅にやって来たソクラテスが、自分のところへ来る青年は一日一日と向上するだろうと言うプロタゴラスに向かって、「あなたについていれば青年は進歩するだろうと、あなたは言われるが、それは何に向かってであり、何に關してなのか?」と質問する。それに対するプロタゴラスの返事は以下のようなものである。「その青年が私のもとに来るなら、彼が他のソフィストにつく時に受けるような目には会わずにすむだろう。何故なら、ほかのソフィスト連中は青年達を痛めつけるからだ。彼ら他のソフィスト達は、青年達が専門的な学術(*techné*)から折角逃げ出しているのに、無理矢理引き戻して、やれ算術だ、天文学だ、幾何学だ、音楽だと教え込んで、またしても専門的な学術の中へ放り込むのだからね。……しかし私から学ぶものは何かと言うと、身内の事柄については最もよく一家を斉える道をはかり、さらに国家公共の事柄(*tes poleos*)については、これを行うにも論じるにも、最も有能有力の者となるべき道をはかることの上手というものである。」(318D-319A, cf. 311B-312B)

個々の専門技術ではなく、国家（ポリス）が成立するためには、「正義」や「節制」といった〈徳〉が、教えられなければならない。自分はそれを教えるのだというのがプロタゴラスの標榜するところであるが、もともと国民全てがこれを分かち持っているというのがプロタゴラスの主張である。プロタゴラスはこのことを物語の形で説明する。——他の動物と違って、厚い毛皮だとか蹄だとかいった、身の保全の装備を何一つ賦与されなかった人間は、最初のうちはばらばらに任んでいたために、力の弱い存在で他の動物によって滅ぼされて行つた。これを心配したゼウスは、国家の秩序を整え友愛の心を結集するための絆になるものとして、「戒め」(μῆτις)と「慎み」(αἰδώς)を人間に与えた。従つて国家が成立するためには、すべての国民が〈正義〉〈節制〉といった徳を分かち持たなければならず、これらは教えられ得る、というのである(320D-324D)。なお、この対話篇はプラトンの初期の対話篇であろうと思われ、さらに対話設定年代は、ペロポネソス戦争の始まる直前くらい(433/432)のことと思われる。藤沢令夫訳『プロタゴラス』(岩波「プラトン全集」八)二四五―二四六頁の解説を参照。

- (21) Plato: *Gorgias* 449AB.
 (22) *Ibid.*, 452DE. 以上、449D 以下を参照。
 (23) *Ibid.*, 455B-456C.
 (24) *Ibid.*, 457A-C.
 (25) このヘレネは、もちろん、スパルタの王メネラオスの妻で、スパルタに滞在していたトロイアの王子アレクサンドロス（パリス）と墮落ちし、それがトロイア戦争のきっかけになったという、『イリアス』などに登場する伝説の人物である。
 (26) 以上、Diels-Kranz: *op. cit.*, 82B, 11.
 (27) Plato: *Meno*, 73D.
 (28) Plato: *Respublica* I, 343B.
 (29) *Ibid.*, 343D-344C.
 (30) 注(2)を参照。
 (31) Plato: *Gorgias*, 484E-485C.
 (32) Aristophanes: *Nephelai*, 961-984. なお訳は田中美知太郎訳(ちくま文庫「ギリシア喜劇」)に従う。
 (33) *Ibid.*, 1341-1342.
 (34) *Ibid.*, 1339-1429.
 (35) セクストゥス・エンペイリコスがゴルギアスのものとして伝えている『非存在について』もしくは、『自然について』(Sextus Empiricus: *Adversus Mathematicos*, VII, 65ff. = DK. *op. cit.*, 82B 3) は、「何もものも存在しない」ことを論証しているものである。

が、これは明らかにエレア派の論法をもじったものと言える。なおまた、エレア派の後継者と言うべき、アプデラのデモクリトスが、運動し変化する現実の世界を説明するために、〈あらぬもの〉たる〈空虚〉を、ある意味では〈ある〉のだとしたことが、自然学者・哲学者の間では新たな転機を画したと言えるが、しかし一般の人々には、学説というものは日常の判断とは別次元のものとしてしか考えられなくなったと言える。

- (36) Plato: *Apologia Socratis*, 26CD.
 (37) Herodotus: *Historiae*, IV, 64.
 (38) *Ibid.*, IV, 68.
 (39) *Ibid.*, V, 6.
 (40) *Ibid.*, I, 196.
 (41) *Ibid.*, I, 201-214.
 (42) *Ibid.*, I, 216.
 (43) DK., *op. cit.*, 90, 2, (14). なお『両論』については注(12)をも参照。
 (44) ヘロドトスは小アジアアカリア地方のハリカルナッソス出身であって、母の名はギリシア系であるが、父や、兄弟もしくは叔父の名はカリア系で、ヘロドトス自身、混血だったとも考えられる。松平千秋訳『ヘロドトス 歴史』解説(下巻、三七一頁以下、特に三七二、三七八〇頁を参照)。
 (45) Herod. *op. cit.*, III, 37-38.
 (46) DK., *loc. cit.*, (19).
 (47) Whitehead, *op. cit.*, p. 25.
 (48) *Loc. cit.*
 (49) Plato: *Leges* III, 692E-693A.
 (50) ヘロドトスの旅行の詳細は不明であるが、故郷ハリカルナッソスの独裁者が倒され(四五〇年代始め頃)、民主制が敷かれ、それから、四四四年にトゥリオイに移住するまでの間に、アテナイにも来たと思われる。彼がペリクレスやソポクレスと交友関係を結んでいたのは確かである。
 (51) Herodotus: *op. cit.*, V, 78.
 (52) Plato: *Leges* III, 694AB.
 (53) *Ibid.*, 697AB.

- (54) *Ibid.*, 693D.
 (55) *Ibid.*, 698AB.
 (56) *Ibid.*, 693DE.
 (57) Bergson: *op. cit.*, pp. 1-2. 森口訳に従ったが、若干、簡略化し、口調の点でも変更した。
 (58) *Ibid.*, pp. 304-305.
 (59) Plato: *Phaedo* 66CD.
 (60) *Ibid.*, 66B-57B や参照。
 (61) 注 (47) 及び(48) を参照。
 (62) Plato: *Laches*, 190E.
 (63) *Ibid.*, 191D や参照。
 (63) Plato: *Theaet.*, 161CD.
 (64) *Ibid.*, 179AB.
 (65) Plato: *Gorgias*, 464B-D.
 (66) Plato: *Resp.* IV, 435E.
 (67) 特じ、 *Timaeus* 41C-42E や参照。
 (68) Plato: *Resp.* IV, 434CF; *Timaeus* 69CF や参照。